



## 緊急報告

### 北海道宮島沼におけるマレック病感染マガン

酪農大野生動物医学グループ(酪農学園大学獣医学部)

富川 徹(財)野生生物総合研究所)

大橋和彦・小沼 操(北海道大学大学院獣医学研究科)

#### はじめに

マガン *Anser albifrons* (国の天然記念物) は、ロシア・カムチャツカ州などで繁殖し、渡りの途中の秋と春、北海道美唄市宮島沼に約4から6万羽が集結し、本州の湖沼で越冬する。したがって、宮島沼における感染症の発生は、わが国のマガンの保全生物学上、きわめて重要である。

今回、2001年秋に飛来したマガン個体群の1個体がマレック病と診断された。

今後は、各自治体や獣医大学などが、本州以南の各マガン飛来地で情報収集や調査などが行われる必要がある。まず、経緯を報告する。

#### 分 担

なお、この著者「酪農大野生動物医学グループ」は中出哲也・中島崇雅(獣医外科学第二教室：搬入個体の受け入れと治療、外部機関への本症確認の連絡、申請業務などを担当)、浅川満彦・中村 茂(獣医寄生虫学教室(野生動物学)：体部測定、解剖サンプリング、寄生虫学的検査、仮剥製標本作製および各研究者間の調整業務などを担当)、谷山弘行・三井隆行(獣医病理学教室：病理組織標本の作製と診断を担当)および遠藤大二(放射線学教室：分子生物学的手法によるウイルス学的診断を担当)で構成されている。また、共著者の大橋・小沼は、遠藤とは別の分子生物学的手法により今回の材料を検討した。よって、より詳細な報文は臨床学、病理学、分子生物学、ウイルス学、寄生虫学、野生動物学、放射線学などの専門誌などに投稿されよう。

#### 経 緯

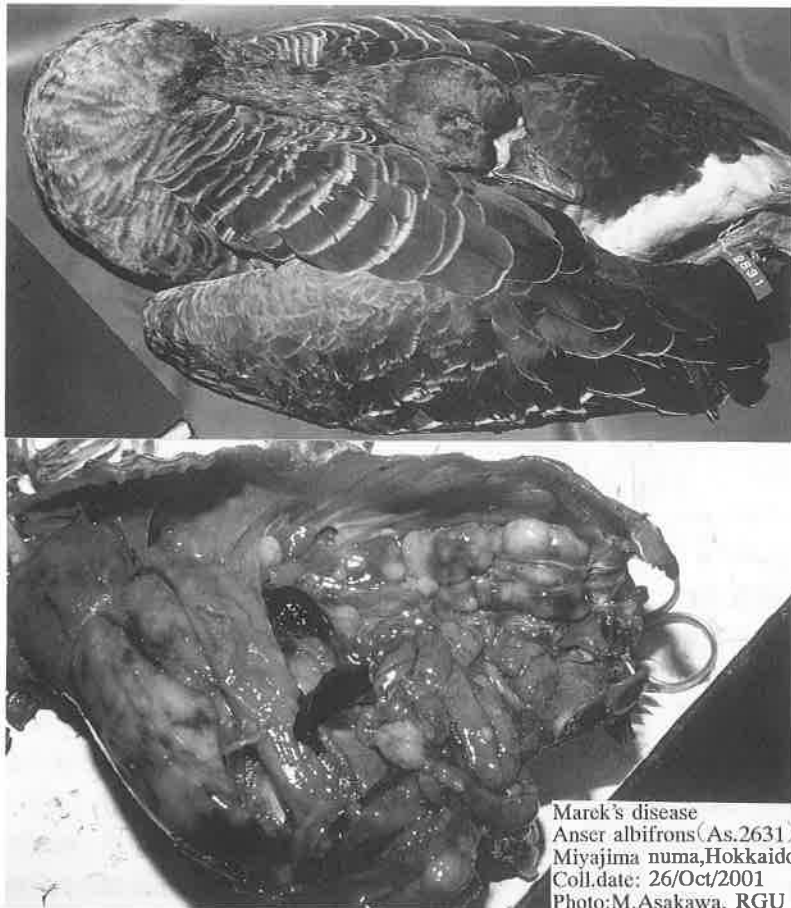
2001年10月25日、午前8時40分、宮島沼東側の用水路で、富川らがマガンの調査中(環境省委託)、動けなくなっていたマガン(雌成鳥)1羽を発見し、翌日、捕獲した。そこで、美唄市教育委員会の川守田氏を経由して、すぐに酪農学園大学獣医学部動物病院にその個体を搬入した(同大学病院カルテ番号9010-02)。中出がエックス線診断により、右肩関節が脱臼していることが明らかになったので、コーバンにて同部を外固定した。翌日、再脱臼は認められなかったものの、食欲の著しい低下が生じ、10月29日、午前9時、中島が死亡を確認した。同日、中出は美唄市に死亡報告と仮剥製標本(獣医鳥類学の教材と寄生虫学的研究における宿主記録用として)の作製申請を提出した。

#### 剖検所見と診断

翌日、冷蔵保存された同マガンを、浅川と中村が体部計測後、剥皮し、仮剥製標本(登録番号As 2631)を作製した。その後、寄生虫標本の採集のため体部を開腹したところ、退色し種大化した肝臓や腎臓、腹壁や消化管における多数の腫瘍性結節が認められたので(写真)、ホルマリン固定、保存した。同組織を、谷山と三井が、常法に従いヘマトキシリン・エオジン染色組織標本作製した。そして、腫瘍組織所見として、①大小不同のリンパ様細胞が正常組織との境界を不明瞭にびまん性に浸潤性増殖をしていること、②腸管の筋間神経叢にもリンパ様細胞が浸潤していたことから、組織学的にマレック病と診断された。と同時に、エタノール固定された肝腫瘍組織と尾部皮膚を用い、大橋・小沼が分子生物学的に検討したところ、マレック病ウイルスの「強毒型」というタイプであることが判明した。

#### 今後の課題

今後、各地のマガンなどの野鳥について、異常個体や死体については、速やかに関係機関に供与され、マレック病の検査が実行される必要がある。



Marek's disease  
 Anser albifrons (As.2631)  
 Miyajima numa, Hokkaido  
 Coll.date: 26/Oct/2001  
 Photo: M. Asakawa, RGU

写真 (上下とも浅川、撮影)

上：マレック病と診断された野生のマガン個体の仮剥製  
 下：マレック病により多数の腫瘍組織が散在する諸臓器

マレック病ウイルスの感染力が高いこと、感染性の種特異性が低いことから、他の家禽や野鳥への悪影響が懸念される。従来、傷病マガンは、治療後、道内の動物園で飼育されてきた(今回の個体もその予定であった)。しかし、今後は、他の飼育動物への影響を考え、厳重な検疫などが必要となろう。

また、傷病鳥を積極的に受け入れている一般の動物病院は、ウイルスによる汚染や院内感染を防ぐべきである。さらに、安易な放鳥は、結果的に感染症の蔓延に手を貸す可能性もあるので注意したい。

一見健康な野生個体についても、ウイルスに対する抗体の保有検査などを実施し、一刻も早く感染状況の把握をすることが望ましい。将来的には、感染症の蔓延予防の観点から、野鳥の飛来地や越冬地における一極集中を避ける工

夫もなされるべきであろう。

#### 謝 辞

獣医学的検討の一部は酪農学園大学獣医学部 2001 年度学術フロンティア計画の一環で行われた。また、緊急度を鑑み本稿を野生動物医学会メーリングリストへの投稿をご許可いただいた同学会副会長で運用責任者・坪田敏男教授(岐阜大獣医学科)、そのメールに対し多くのご意見・情報を寄せてくださった同学会会員諸兄に深謝する。なお、日本における家禽のマレック病の発生状況などについては、家畜衛生試験場ホームページ <http://niah.naro.affrc.go.jp/disease/fact/2000/marekku.html> がある。